2023年3月12日佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書14章54、66～72節
説教題：弱さを覆う恵み

前にもお話したことがありますが、私は、日本に帰って来て間もない頃、信号無視で捕まりました。日曜日、礼拝の帰りでした。田舎道の小さな交差点を「こちらが優先道路だ」と思って通り過ぎたら、パトカーが追いかけて来ました。その交差点の真中に四方を向いて点滅している小さな信号があったらしいのですが、私はそういう信号機のことを完全に忘れていましたから本当に見えなかったのです。車を脇に寄せて止まると、警察の方がやって来て私に聞かれました。「信号があったでしょう」。「いや、気がつきませんでした」。「あったのですよ」。「お仕事は何ですか」。「えッ！」。仕事を聞かれると思っていませんでした。恥ずかしくて「牧師です」と言えなかった、というか言いたくなかったのです。やっと絞り出すようにして「キリスト教会の牧師です」と言いました。あれほど「牧師です」と言いたくなかったことはありません。家内も、まだ小さかった子供も乗っていましたし、神妙にしていたら、警察の方の口調も柔らかくなられて、最後は違反の切符を手渡しながら「ご迷惑をおかけします」と言われました。「ご迷惑をおかけします」という言葉も何かおかしかったのですが、それ以上に「牧師です」と言いたくなった、その情けない思いが心に残りました。でも―(交通違反ということでなくても)―「お仕事は何ですか」と聞かれた時に「教会の牧師です」と自然に言えないような、そんな自分が今もいます。皆さんはいかがでしょうか。「私はクリスチャンです。私は教会に行っています」と何の抵抗もなく言っておられるでしょうか。

今朝の箇所は、ペテロがイエス様を3度否認する、という有名な個所です。「内容」と「メッセージ」に分けて、ご一緒に学びましょう。

1：内容～イエス様を否んだペテロ

イエス様はゲッセマネの園で逮捕され、大祭司の屋敷に連れて行かれました。ゲッセマネの園から逃げ出したペテロは、大祭司の屋敷までイエス様の後をこっそりつけて行ったようです。そして大祭司の屋敷に入り込むのです。66節に「ペテロが下の庭にいると」(66)とありますから、屋敷の二階部分ではユダヤ議会のメンバーによる「イエスの裁判」が続いている、その「イエスの裁判」と同時並行的に下の庭では「ペテロを取り巻く出来事」が起こっている、そういう状況です。

寒かったのでしょう。裁判が行われている間、下役の者達や屋敷に仕えている者達が火に当たっているのを見て、ペテロもそこに近寄って行ったようです。恐る恐る火に当たっていたのかも知れません。そこに新しい薪が投げ込まれたのか、火が燃え上がりました。ペテロの姿も照らし出されたのでしょう。その時、大祭司に仕える女から突然「あなたは、あのナザレのイエスの仲間でしょう、私は見たんだよ」と言われた。彼は「『何を言っているのか、わからない。見当もつかない』と言って、出口のほうへと出て行」(68)くのです。しかし女はしつこかった。後をついて来ます。そして、そこにいた人々に「この人は、あの人達の仲間です。ナザレのイエスと一緒にいたあの人達の仲間です」と言いました。ペテロは再び打ち消します。しかしこの女一人だけでなく、周りの者達も言い出したのです。「あなたにはガリラヤ訛りがある。あなたはナザレのイエスの仲間だろう」。それに対してペテロは「のろいをかけて」否定します。「のろいをかけて」という言葉を「新共同訳」は「呪いの言葉さえ口にしながら」と訳します。誰を呪う言葉だったのでしょうか。ある注解書は「『私が真実を言っていないとすれば、神が私を裁いて下さるように』と叫んだ」(71)と説明します。「自分を呪った」ということだったのかも知れません。いずれにしても、そのようにしてだんだんと調子を激しくしてイエス様を3度否定した時に、2度目の鶏が鳴くのです。ペテロはそこでイエスの言葉を思い出します。「最後の晩餐」の時、ペテロとイエス様の間でこんなやり取りがありました。「ペテロがイエスに言った。『たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません』。イエスは彼に言われた。『まこと

に、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないと三度言います』。ペテロは力を込めて言い張った。『たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません』…」(マルコ 14:29～31)。「イエス様の言われた通りだった」。ペテロは、自分の現実(本性)を見せられ、情けなさ、恥ずかしさ、悲しさ、自責の念、そのようなどうしようもない思いを抱えて泣くのです。しかしそれは、イエスを「知らない」と言い続けて逃れようとした、ペテロの自我が崩れ始める時でした。本当の意味での悔い改めが始まる時だったのです。

2：メッセージ

この箇所は、2 つのメッセージを語っていると思います。

1）警告～神を否定しない

1 つは、「イエスを否定することに対する警告」です。ペテロは結局、「あなたはナザレのイエスの仲間だ」、そう言われて、イエス様を否定します。初代教会の人々は、ある場合は「ナザレ人という一派」(使徒 24:5)と呼ばれました。「あなたはナザレ人の一派の者だ、連中の仲間だ」、そう言われて迫害されたのです。今の時代に置き換えれば、「あなたはクリスチャンだ、あなたが教会に行っているのを知っている」、そう言われることかも知れません。もちろん、そう言って私達を迫害する人はいないかも知れません。しかし、日本でも戦争中は「敵国宗教を信じている非国民」と責められたのです。ある時、キリスト教放送を聞いていたら、ある人が「戦前は『非国民』と言われ、戦後はマルクス主義の先生から『人類の敵』と言われた」と証しをしておられました。投獄された牧師もいます。解散させられた教会もあります。実際、多くの人が教会を去ったのです。今がそういう時代でないことは、本当に感謝です。

しかし、私達はどうでしょうか。「日本のクリスチャンは、礼拝の出かけに近所の人から『どちらにお出かけですか』と聞かれると、『教会に行きます』とは言わずに、『ちょっとそこまで…』と答える」と聞いたことがあります。教会に行っていることをそっとしておきたい、そういう気持ちからでしょうか。あるいは、思いもしないところで「あなたはクリスチャンだ、教会に行っている」と言われて、身構えてしまうようなことがあるかも知れません。あるいは、仏式や神式の葬儀は、いつもチャレンジです。日本の社会の中で信仰者として生きて行くことは、まだこの国の文化や社会と何の抵抗もなく馴染む、というわけにはいかないのかも知れません。皆さんも色々な葛藤を経験されることでしょう。

しかし、それでもこの話は、「人間は弱いのだ」と語って、私達を慰めようとする物語ではないと思います。やはり、ペテロがイエス様を否定したことを「罪の姿」として描くのです。その意味で、私達が「イエス様を信じて生きていること、教会に行っていること」、もし、それをどこかで隠そうとする思いがあるとするなら、それはこの箇所が語る「神に喜ばれない思い(罪)」ではないでしょうか。「隠そう」とすることも罪でしょうが、(私が信号無視で捕まった時のように)「隠しておきたい、言いたくない」と思うような生活をしているとしたら、それも罪だと言えるかも知れません。もちろん「クリスチャン、クリスチャン」と触れて歩く必要はないでしょう。しかし使徒パウロが「わたしは福音を恥としない」(ローマ 1:16)と言った言葉を、いつも心の中に住まわせておきたいと願うのです。

しかし、私達はもっと表に出ないところで神を否定しているのではないか。この箇所は、それを問うのです。ペテロは呪いました。申し上げたようにそれは「私が真実を言っていないとすれば、神が私を裁いて下さるように」という言葉だったかも知れません。しかしこの言葉は、もっと深い意味を含んでいると思います。彼は自分を呪った。どう呪ったのでしょうか。彼は、心の深いところでこう思ったのではないでしょうか。「なぜ、イエスという男について来てしまったのか。お前はバカだ！」、そう自分を呪い、あるいはイエス様まで呪ったのではないでしょうか。しかし自分を呪う、自分の人生を呪うということは、「自分の人生は神の祝福の中にはない」と決めることです。そういう形で神を否定することです。ペテロには、この後、およそ考

えることも出来なかったような、癒しと、喜びと、祝福が待っていたのに、です。
　しかし私達もまた、このようなことをしてしまうことがあるのではないでしょうか。「自分は神の祝福の中にいるのだ」ということを認めない、否定する。そうやって、神様を心の中で否定してしまうことがあるのではないでしょうか。私は、鬱で入院した時、自分を呪いました。「なんでこんなことを始めてしまったのか。お前はバカだ！」。そして信仰も、神様も、どうでも良くなりました。私は「自分は神の祝福の中にいる」ということをとても信じることは出来ませんでした。友人が病室を訪ねて来て、言ってくれました。「神は、もうあなたのために業を始めておられるのだよ」。そんなこと、とても信じられませんでした。でも、その通りだったのです。その時も、私は神の恵みの御手の中にいたのです。
　色々な状況が私達の毎日の生活の中にあります。その中で現実の問題に翻弄されて、「自分が神の祝福の中にいる」ということを信じることが出来ないようなこともあると思うのです。一昨年の鬱の時は、私はより激しく神の恵みを否定しました。神様さえ呪いました。しかし、この箇所は、私達に語るのです。「神の祝福を否定していないか。神の祝福の中にいることを否定してはならない。神の深いみ旨、深いお考え、を信じなさい」。

2）慰めと励まし～神が救いを達成して下さる
　しかしこの箇所は、「イエスを否定してはいけない」と叱咤激励するだけではなく、慰めと励ましも語るのです。「マルコ福音書」というのは、ペテロが語ったことをマルコが書いた、と言われます。ということは、ペテロにとってのこの情けない話は、どこから出て来た記事かというと、他ならぬペテロの口から出て来たことなのです。ペテロにしても、出来れば知られたくなかったことだと思うのです。なぜペテロは、このことをわざわざ語ったのか、「福音書」の中に記録として留めたのでしょうか。
　ペテロは、イエス様の言葉を思い出して泣きました。イエス様は、ペテロの裏切りを見抜いておられたのです。しかし「ペテロの物語」は、そこで終わりではなかったのです。ペテロの涙を拭って下さる方がおられたのです。イエス様です。「ルカ福音書」によれば、最後の晩餐の時、イエスは言われました。「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ 22:31～32)。この言葉は、何を意味するのでしょうか。
　イエスはペテロの裏切りを知っておられた、ペテロ以上にペテロの真の姿を知っておられた、しかしそれを知った上でペテロを赦しておられた、ということです。ペテロの裏切りを赦し、しかも信仰がなくならないように、立ち直ることが出来るように、祈っておられたのです。ペテロにとって、この言葉がやがてどれほど大きな慰めになっていったことでしょうか。悔い改めを助けたことでしょうか。
　そして、この言葉をサポートするかのように、イエスが甦られた日、墓に行った婦人達に天使は言いました。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません…ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます。』とそう言いなさい」(マルコ 16:6～7)。ペテロが、神の配慮の真中にいるのです。「ルカ 24 章 32～34 節」には「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、『ほんとうに主はよみがえって、シモン(ペテロ)にお姿を現わされた』と言っていた」(ルカ 24:33～34)とあります。甦られたイエス様は、まずペテロを訪ねて下さったのです。このようにしてペテロは、絶望の涙の中から、イエス様の赦しと慰めと励ましの中で立ち上がって行くのです。やがて弟子達は「使徒」として任命されますが、ペテロがそのリーダーとされて、彼は伝道の生涯を生きて行くのです。この時にも「あなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(22:32)、この言葉がどれだけ大

きな意味を持ったでしょうか。「自分のようなものが…」、彼はそう思ったでしょう。でもイエスは「あなたは、また兄弟を力づけて行くのだ」と言われたのです。そして彼は、迫害の中にいる信仰者達を励まし続け、最期には、皇帝ネロの迫害の中で殉教して行くのです。バチカンの聖ピエトロ大聖堂は「ペテロが十字架で殉教した、その場所に建てられている」と言われます。ペテロは救いの生涯を全とうして、見事に天に凱旋して行くのです。

どうして彼は、そういう生涯を生き抜くことが出来たのでしょうか。彼が強かったからでしょうか。そうではありません。彼ははっきりとイエス様を否定した、イエス様を捨てたのです。イエスを信じてついて来た自分を呪い、もしかしたらイエス様を呪いました。しかし、イエス様がそのペテロを赦し、包み込み、ペテロの涙を拭い、再び立ち上がらせて下さったのです。涙の中で悔い改めるペテロに、聖霊の力を覆わせ、その歩みを導いて行かれたのです。ペテロは自分の弱さを知りました。自分の罪を知りました。それだけに「その弱い、罪深い自分を、主は赦し、導き続けて下さった」、そのことを語りたかったのではないでしょか。それが「福音」です。それを語り、クリスチャン達に、自分がたとえどんな状態になろうとも信仰を諦めないこと、救いを諦めないこと、赦しがあること、「神は恵みの神であること」、そのことを言いたかったのではないでしょうか。

私達も思い出せば、恥ずかしいこと、自己嫌悪に陥りそうなこと、自分の中に大きな傷を持ち、心には棘が刺さっている、しかも日々の生活の中で小さな失敗を重ね、時には思いがけない時に神の恵みを否定してしまうこともある、そんな者ではないでしょうか。しかし、そんな私達にも、神の赦しと、慰めと、励ましは尽きないのです。そして、ペテロが自分の大失敗を、失敗の故にイエス様のことが分かり、福音が分かり、神に立ち上がらせてもらったそのことを、人々に語りたいと思うようになったように、私達の失敗は、失敗のままでは終わらないのです。神は、それさえ私達のための益にして、私達を導いて下さるのです。そして、その躓いた経験は、信仰の立つ瀬となり、さらに誰かを励ます証しとなるのです。

あの遠藤周作の「最後の殉教者」という短編の中でも、長崎で起こった迫害の中で一番最初に信仰を捨てた臆病者の喜助に、神が語られ、彼を立ち上がらせ、その喜助が、拷問に耐え、信仰を守っていた村人を励まして行ったように、私達の辛い経験は、誰かを慰め、励まし、支えるものとなるのです。私達は、ペテロを赦し、慰め、励まし、恵みを注ぎ立て上げて下さった、その神様を信じているのです。何という恵みでしょうか。

終わりに

ペテロの姿は私達に「主を否定することへの警告」を語ります。同時に「私達の救いを全うして下さる神の大きな御手」を語ります。私達も、信仰を精一杯働かせて、恵みの神を証しする生涯を生き抜きたいと思います。